

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01633

研究課題名（和文）大学の教員養成における「省察」言説の生成・受容とその問題に関する総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study on the generation and reception of "reflective" discourse in university teacher training and its problems

研究代表者

山崎 準二（Yamazaki, Junji）

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：50144051

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代日本の教員養成の領域において広範に浸透してきている「省察」に関する理念と活動に関して、「省察」に関する理論的及び政策的な実態の調査と分析、教員養成の実践の中での「省察」活動に関する実態の調査と分析、イングランド及び米国における「省察」に関する研究的動向の調査と分析を行った。

その結果、「省察」活動が本来の意味内容とは異なりたんなる「自己反省」活動と認識されることが多く、また「省察」活動に取り組むこと自体が自己目的化されることも多いという実態にあることが明らかとなった。今後、「批判的省察」活動を中心とした教員養成プログラムの発信が大学の役割として重要となっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の教員養成政策の重点の一つとして、大学と学校現場が連携しての「理論と実践の往還」活動の推進と、その具体的方策としての「省察」活動が提起されている。さらに大学での養成教育や学校現場での実習指導を担う教師教育者の資質能力向上もまた課題となってきている。本研究は、「省察」活動に関わる理論的な整理と分析、養成教育の実践上の実態と分析、海外の動向との比較による分析という研究作業結果によって、上述のような喫緊の政策的課題を「省察」理念の本来的な姿に即しながら遂行していくための基盤を提起できたといえる。

研究成果の概要（英文）： This research focuses on the philosophy and activities related to "reflection," which has become widespread in the field of teacher training in modern Japan, and the purpose of this research is to investigate and analyze the theoretical and policy realities of "reflection" and to examine the practical aspects of teacher training. We conducted a survey and analysis of the actual situation regarding "reflection" activities in England and the United States. As a result, the reality is that "reflection" activities are often perceived as "self-reflection on something you've done wrong" activities that differ from their original meaning, and that engaging in "reflection" activities itself is often made into a self-purpose. In the future, disseminating teacher training programs centered on "critical reflection" activities will become an important role for universities.

研究分野：教師教育

キーワード：省察 教員養成 教師

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「省察 (reflection)」は、現在、教師の専門性の中核を成す理念として受け入れられ、教師教育に関する研究、養成教育や現職研修等の教師教育に関する実践などに広範に組み込まれている。そうした現状の下、「省察」は、研究及び実践の営みにおいて、次第に、一定の「権威性」を帯びた自明な「前提的枠組み」として、あるいは所与の問題解決に向けて「自分の良くなかった点を認めて、改めようとすること(『大辞泉』小学館)」という意味側面のみが強調される「『反省』行動」として用いられがちになってきている。そういう傾向状況の中で、教師教育領域においては「言説(discourse: 本来の語源の意である『あちこち走り回ること』や『談話・討論・論証すること』が消失してしまった教義化された状態)」化されている。こうした「省察」の非省察性の強まりという皮肉な状態は、教師教育をめぐる問題の所在をも不可視化してしまっている。したがって、「省察」それ自体が問い直されぬまま教師の専門性の中核を成す絶対的理念と化す傾向にある今日、大学における教員養成の「省察」言説を相対化し、不可視化された問題状況を明らかにする研究が必要となってきたのである。

2. 研究の目的

「省察」は、教職大学院の拡大と結びつきながら教員養成改革に必須の要件として認知され、現在ではあらゆる教員養成カリキュラムに組み込まれている。もはや、それ自体の意味を深く問い直す必要がないかのように受容されていると言ってもよいだろう。しかし、こうした「省察」の自明視は、「省察」に依拠した教員養成が孕む問題を不可視化する。それを防ぐためには、「省察」を分析の対象として相対化する研究が必要なのである。

本研究は、「省察」ブームの陰に隠れて進行する、そうした「省察」をめぐる様相の今だからこそ、いったん立ち止まって、「省察」に関わる現状をさまざまな視点からラディカル(根源的・徹底的)かつクリティカル(批判的=「権威性」「前提的枠組み」までも問い質す)に省察する必要があるのではないかとの問題意識の下で、共同研究に取り組んできた。

3. 研究の方法

4年間にわたる共同研究(2020-2023年度)においては、3つのグループ(第1:教師教育における「省察」分析のための基礎的理論的研究グループ、第2:日本国内における教員養成教育における「省察」の生成と展開の実態調査的研究グループ、第3:海外(特に英米)の教師教育における「省察」の生成と展開の動向調査的研究グループ)を組織した。第1グループでは、教師教育領域における「省察」の受容と展開・普及の動向とその特徴を理論的・制度的・研究動向的な面から分析してきた。第2グループでは、大学における教員養成に実際に携わっている大学教員を対象とした事例調査から、「省察」概念がどのように受けとめられ、いかなる形で実践化されており、どのような困難や葛藤が生まれているかを分析してきた。第3グループでは、「省察」をめぐる海外での動向について、日本に先んじて「省察」が広まるとともにそこから生じる問題が自覚されて「省察」概念の検討が進んだ欧米、とくに米国とイギリスを対象にして検討し、日本の「省察」を問い直す手がかりを得ようと訪問・面接調査を行ってきた。

全体会合にて研究活動方針を討議するとともに、そこで合意・確認された全体方針に基づいて各グループが具体的な研究作業を推進し、それを日本教育学会や日本教師教育学会等で報告し会員諸氏からの批評・助言を得て、再び全体会合を開催し、各グループの研究成果の共有化を図るとともに共同検討・討議を重ねるということを繰り返してきた。

4. 研究成果

「行為の中の省察」論や「省察的实践者」論に象徴される D. ショーンの考え方の特徴を分析・把握し、その特徴からして、「省察」ないし「省察的」概念が日本の教師教育研究に浸透していく過程で新たな問題点をも生み出してきていることがいえる。すなわち、「省察」は教員養成研究において、本来「大学における養成」へと高度化する鍵概念として捉え直されるべきものであるが、現状では実務家養成と専門家養成の両方向に向かう傾向を併せ持たされることによってその意味が不鮮明になっている状況を、また養成教育において「省察」が自己目的化されるようになるとともに状況変革と切り離され、たんに個人の取り組みの「反省」ツールに墮してしまいかねない状況を、さらには「省察」行為がたんなる思いつきの試行に流れる傾向を生み出すことによって結果的に教師の成長の姿を狭めてしまいかねない状況を、それぞれもたらしてきていると指摘しうる。社会科教育と体育科教育を対象とした教科教育研究活動の実態調査の結果においては、「省察」の受容・展開の様式においても、リフレクションシートの開発と分析が多く、そこにおいては「省察」の視点も提起されていたが、そのことが逆に、「省察」をたんにあらかじめ明示されている視点に即しての「振り返り」活動に過ぎなくしてしまう、さらには「省察」を教師が自己を「支配＝管理」する技術にしてしまいかねない、という問題点も指摘しうる。

教員養成に携わる 11 名の大学教員を対象とした調査から、「省察」概念との出会いと捉え方には、各大学教員の専門分野における研究や実践の中で重視されてきたこととの関係でその意味内容が構築・受容されており、多様であることが確認された。各大学教員はそれぞれの置かれた状況の中で、自身の専門性におけるこだわりをもとに、さまざまな困難や葛藤を抱え試行錯誤しながら、省察の実践化と追究を行っているという主体的な側面があることも確認された。実践志向の強化という動向の下で、学問知に基づいて省察を喚起する機会は減退している状況がうかがわれる。「振り返り」を行うことのみが目的化されて、それを学生に要求することを大学教員が強いられている実態の問題性も指摘しうる。

「省察」をめぐる海外での動向について、日本に先んじて「省察」が広まるとともにそこから生じる問題が自覚されて「省察」概念の検討が進んだ欧米、とくに米国とイングランドを対象にして検討し、日本の「省察」を問い直す手がかりを得ようとした。米国では代替的な教員資格取得ルートの拡充、イングランドでは学校ベースの教員養成の主流化が進む結果、教員養成に関与する主体は多様でその相互関係は複雑となり、企業化・民営化も進行してきている。省察概念は、米国・イングランドを含む各国の教職スタンダードに、教師個人の能力・成果を重視する行為遂行的(performative)な立場に親和的な形で位置付けられており、省察の「他律化」「技術化」「矮小化」「個人化」は大学と切り離された教員養成でいっそう顕著となる。これに対して、大学の教員養成の現場からは、「社会正義」志向の教師教育プログラムの開発・実践や批判的省察の重要性の書籍による発信がなされている。いずれも、「大学における」養成そのものが過度な実践重視で現場に近づいていく傾向がある日本とは異なっている。

今後の課題としては、第 1 に、新たな展開状況に対応して、「省察」に関わっての理論的制度的研究動向的な分析と海外動向との比較研究的な分析をさらに発展的に継続していくことであり、同時に実態調査的な分析の対象を教職大学院のみならず学部段階にまで拡充して取り組んでいくことである。また、「省察」に関わる取り組み(とりわけ教育実習や学校現場体験活動)を担い導く教師教育者の在り方と専門的力量的有り様、そうした人材の育成に関する内容・方法や組織・条件整備についての研究が必要である。他の対人援助職、とりわけ D. ショーン理論の導入と「省察」の取り組みが進む看護師教育領域との研究的実践的交流、そのことを通しての教師教育領域での研究的実践的な新たな視界の開拓である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 15件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 朝倉雅史・高野貴大・高野和子	4. 巻 7-1
2. 論文標題 教師教育における「省察」言説の生成と展開に関する海外動向と予備的考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 筑波大学教育学系論集	6. 最初と最後の頁 29-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長谷川哲也（谷口陽一と共著）	4. 巻 38-1
2. 論文標題 学習指導をめぐる初任者教員と初任者指導拠点校指導教員の変容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	6. 最初と最後の頁 111-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎準二	4. 巻 30
2. 論文標題 教師のライフコースと教師教育学研究の課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教師教育学会年報	6. 最初と最後の頁 8-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高野和子	4. 巻 30
2. 論文標題 日本教師教育学会と教育学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教師教育学会年報	6. 最初と最後の頁 32-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朝倉雅史・高野貴大・高野和子	4. 巻 17-1
2. 論文標題 教師教育における「省察」言説の生成と展開に関する海外動向と予備的考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 筑波大学教育学系論集	6. 最初と最後の頁 29-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高谷哲也 (山本遼と共著)	4. 巻 63
2. 論文標題 教職大学院におけるスクールリーダー教育の意義と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育経営学会紀要	6. 最初と最後の頁 184-187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山崎準二	4. 巻 6
2. 論文標題 教職履修学生に関する2019年度調査報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学習院大学教職課程年報	6. 最初と最後の頁 95-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高野和子	4. 巻 43
2. 論文標題 「教職課程コアカリキュラム」と「参照基準 (教育学分野)」 - 教員養成の質保証にかかわる二つの文書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 明治大学教職課程年報	6. 最初と最後の頁 9-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浜田博文	4. 巻 209
2. 論文標題 危機に立つ教職 その劣位化をくいとめるカギは何か？	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊教育法	6. 最初と最後の頁 4-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中里佳	4. 巻 87(4)
2. 論文標題 教師の「専門家コミュニティ」の形成 教師の学習に寄与する他者とのネットワークからの考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 67-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中里佳	4. 巻 64
2. 論文標題 日本における教師の「省察」概念の定着と教師の学習概念の提起	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 105-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高谷哲也 (藤朱里と共著)	4. 巻 72
2. 論文標題 校内研究における学習スタイルの変化がもたらす教師の課題認識に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要 (教育科学編)	6. 最初と最後の頁 139-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高野和子	4. 巻 27
2. 論文標題 教員養成の軌跡と見通し――日英比較の視点――	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日英教育研究フォーラム	6. 最初と最後の頁 17-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高野和子	4. 巻 46
2. 論文標題 明治大学の教員養成――2023年度の時点を考える――	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 明治大学教職課程年報	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎準二	4. 巻 9
2. 論文標題 教職履修学生に関する2022年度調査報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学習院大学教職課程年報	6. 最初と最後の頁 129-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗原峻・菊地原守・村井大介・長谷川哲也	4. 巻 34
2. 論文標題 「省察」に関する教職大学院生の経験と認識	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 99-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長谷川哲也
2. 発表標題 教職大学院の政策展開と「省察」概念の位置づけ
3. 学会等名 日本教師教育学会第32回研究大会ラウンドテーブル
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高谷哲也・田中里佳・山内絵美理
2. 発表標題 教師教育に携わる大学教員の実践における「省察」概念の受容事例
3. 学会等名 日本教師教育学会第32回研究大会ラウンドテーブル
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高野貴広
2. 発表標題 国外の教師教育における「省察」概念の受容事例
3. 学会等名 日本教師教育学会第32回研究大会ラウンドテーブル
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高野和子
2. 発表標題 教師教育 - 教育学教育 - 教育学研究：「参照基準（教育学分野）」を出発点として
3. 学会等名 日本教育学会第79回大会公開シンポジウム 教師教育と教育学研究の新たな課題
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高野和子
2. 発表標題 教職課程の質保証とは - 日本学術会議「教育学分野の参照基準」を念頭に
3. 学会等名 日本教師教育学会第30回研究大会 特別課題研究 「大学教育と教職課程」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 浜田博文
2. 発表標題 教師教育を原理的に問い直す～教師を目指す学生が大学で学ぶべきことは何か？～
3. 学会等名 日本教師教育学会第30回大会公開シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 朝倉雅史（岩田昌太郎と共同発表）
2. 発表標題 自律的活用を促進する保健体育科教員の専門職基準に関する研究 NBPTS策定基準の分析
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第40回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三品陽平・長谷川哲也・村井大介
2. 発表標題 教師教育における「省察」言説の生成と展開に関する予備的考察
3. 学会等名 日本教師教育学会第31回研究大会ラウンドテーブル
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 朝倉雅史・高野和子・高野貴大・田中里佳・三品陽平
2. 発表標題 英米の教師教育における『省察』言説の生成と展開(1)
3. 学会等名 日本教師教育学会第31回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三品陽平
2. 発表標題 教員養成研究における省察諸概念の展開
3. 学会等名 日本教師教育学会第33回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高野貴大
2. 発表標題 米国カルフォルニア大学ロサンゼルス校における社会正義に資する教員養成に関する一考察
3. 学会等名 日本教師教育学会第33回研究大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山崎準二	4. 発行年 2023年
2. 出版社 創風社	5. 総ページ数 612
3. 書名 教師と教師教育の変容と展望	

1. 著者名 山崎準二・高野和子・浜田博文（編著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 249
3. 書名 「省察」を問い直すー ー 教員養成の理論と実践の検討	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高谷 哲也 (Takatani Tetsuya) (00464595)	鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授 (17701)	
研究分担者	三品 陽平 (Mishina Yohei) (00710849)	愛知県立芸術大学・音楽学部・准教授 (23902)	
研究分担者	濱田 博文 (Hamada Hirofumi) (20212152)	筑波大学・人間系・教授 (12102)	
研究分担者	田中 里佳 (Tanaka Rika) (20839146)	三重大学・教育学部・教授 (14101)	
研究分担者	高野 和子 (Takano Kazuko) (30287883)	明治大学・文学部・専任教授 (32682)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高野 貴大 (Takano Takahiro) (40881529)	茨城大学・教育学部・助教 (12101)	
研究分担者	朝倉 雅史 (Asakura Masashi) (50758117)	筑波大学・人間系・助教 (12102)	
研究分担者	山内 絵美理 (Yamauti Emiri) (60909026)	東海大学・農学部・特任助教 (32644)	
研究分担者	栗原 峻 (Kurihara Ryo) (60965606)	学習院大学・文学部・助教 (32606)	
研究分担者	村井 大介 (Murai Daisuke) (80779645)	静岡大学・教育学部・講師 (13801)	
研究分担者	長谷川 哲也 (Hasegawa Tetsuya) (90631854)	岐阜大学・教育学部・准教授 (13701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------